



## 「白光」(Byakko) を読んで

朝井まかて著 文藝春秋社刊

聖像画師 「山下りん」の伝記である。

私はこの人の名前を今まで聞いたことがなかった。聖像画家という職業もこの本で初めて知った。聖像画(イコン)というのはロシア正教会の信者のために、キリスト、マリアや聖人の姿等を描いた絵で、これを信者に配布し、在宅で祈る時の対象とするもので有る。聖像画には作者の名前を書かないため一般の人にはその作者の名前は知られていない。

山下りんは旧笠間藩牧野家の下士の家に生まれた。版籍奉還、廃藩置県などの改革で旧武士階級のものには給付金が与えられたが、新政府の資金不足でそれも打ち切られた。口減らしのため、結婚、養子などが急がれた。りんは嫁いだ友人の話から結婚すれば自分の時間を持つ余裕がなくなることを知り、絵を学びたい思いが募り家出をしたが、ようやく東京の親戚へたどり着いた所で引き戻された。

結婚はしない、絵を描きたいとの意思が固いことから東京の親戚に預けられた。東京で自活するため内弟子となるべく絵の先生を探し、ようやく4人目の先生のところで内弟子となった。政府の文化振興の政策で美術学校が出来、入学することが出来た。そこで絵を描く基礎の勉強が出来た。学校で知り合った友人の伝手でロシア正教会の聖像画制作の仕事を見つけて教会に入り信徒となった。教会は信徒を増やすため聖像画を配るので、聖像画を描く仕事はいくらでもあった。

後にニコライ堂を建てたニコライ主教に勧められ、ロシアのサンクトペテルブルグへ留学することが出来た。日本初の絵の女子留学生である。本人は西洋画の勉強が出来るものと思っていたので、十分な食事も与えられず、同行の司祭の子守をさせられながらも耐えてようやく現地の教会に着いた。しかし、西洋画の勉強どころではなく工房で聖像画の制作に明け暮れた。願い続けてエルミタージュ博物館でラファエロなどの西洋画を見学することは出来たが、美術学校へ入ることは叶わなかった。休日には出かけた先の風景などの絵を描いて勉強したが、徐々に体調を崩してしまい、帰国することになった。

帰国後暫く教会を離れて、友人の印刷屋の石版印刷の下画を描く仕事をしていた。その後暫くしてまた教会へ戻った。洋画の道に進んだ友人から誘われたが、洋画の道は断念した。教会の聖像画を制作する工房を任され、制作する内に聖像画の技量が上がり、ロシアの皇太子が来日した折の土産として差し上げる聖像画の制作を依頼されるようになった。聖像画の制作に明け暮れていたが、ニコライ主教が聖堂を建設することになり、聖堂に掲げる聖像画を制作した。この聖堂は何度も火災に遭遇しりんの制作した絵は焼失したが、現在御茶ノ水駅の聖橋口近くのニコライ堂である。

明治初期から大正時代に貧乏と戦いながら生きた聖像画師の生涯を、実に細かく調べて書き上げた力作だと思う。